

73回目を迎えた終戦記念日に思う

私たちはピースでいこう

だれがなんていったて、戦争は嫌だ！

終戦記念日とは

戦争を知らない世代に戦争の経験と平和の意義を伝えるため、この日を「戦没者を追悼し平和を祈念する日」とすることが1982年閣議決定されました。

しかし、戦争の記憶は体験者の高齢化と共に忘れ去ろうとしています。その一方戦争を経験していないこの国の指導者は戦争のできる国へと着々と準備を進めてきています。

忘れ去られようとしている記憶

「戦争の記憶が薄れていく事をいいことに、最近では日本軍の「勇戦敢闘(勇敢に戦い惜しくも破れる=の意)」、「殉国美談」といった話にかくれ、軍の残虐性や住民の犠牲などが見えにくくなってゆく。(2018.6/17中日サンデー版)」といわれています。一方子供たちには、軍隊の本質を隠すかのように、教科書の記述を書き換えが進められています。軍による残虐行為の削除、書き換えが続いています。

亡くなった翁長沖縄県知事の姿勢に学ぶ

先日、亡くなられた翁長沖縄県知事は、ガンと闘うその容姿は痛々しいものがありました。しかし毅然として政府に異を唱える姿は決意の固さを表していました。かつて沖縄自民党県連の幹事長まで努めた保守の重鎮がここまで強大な権力と闘うことができたのでしょうか。それは沖縄がかって戦場と化し、多くの住民が犠牲となった事に思いをさせ、二度と戦場にしない決意からだと言われています。

基地をなくすため、また戦場にしないために保守でも革新でもない立場で、平和のために奮闘する姿に多くを学びました。

戦力を持つことで得られる平和など無い

その沖縄では、6月23日「沖縄慰霊の日」として毎年追悼式が行われます。毎年ここで、平和の詩が朗読されます。今年は浦添市の中学生相良倫子さんが詩を読み上げました。「生きる」と題した詩は、美しい島に生まれながら、美しい島が戦場と化し、変貌したことにあらためて戦争の悲惨さを訴えました。彼女は詩の中で「～略～戦争の無意味さを、本当の平和を。頭じゃなくて、その心で。戦力という愚かな力を持つことで、得られる平和など、本当は無いことを。～略」と言い切っています。まさにその通りです。

よく、戦争放棄など現実的でないという人たちがいます。しかし世界の情勢を見てみると武力で得られる平和などありません。武力で平和こそ幻想なのです。

8月は戦争関連の特集が多く企画されます。戦争の本質を見極め、予想される憲法改正の国民投票では改正に反対の意思表示をしようではありませんか。